

日本組織培養学会

昭和50年12月15日発行

会員通信

第27号

発行責任者

※佐藤温重・※梅田誠

※※加納永一

※横浜市南区浦舟町 横浜市大・医学部

※※京都市東山区山科御陵 京都薬大

★1976年 1977年度幹事選挙について

幹事の半数の改選が同封の選挙要領で行われることになった。例年投票率が極めて低いのであるが、最高審議機関である幹事会の重要性を考え投票を行って下さい。

★第41回研究会開催について

世話人である高木良三郎氏から下記の予定で開催するとの連絡があった。

日 時：昭和51年5月28日(金), 29日(土)

会 場：福岡市中央区渡辺通二丁目 電気ビル本館地下7, 8号会議室

シンポジウム：“functional culture” (予定)

★幹事会および総会議事録

10月23日(木)、盤石荘(宇都宮市大谷)にて幹事会が開かれ、下記事項について協議された。これらの協議事項は翌24日(金)の第40回研究会総会においていづれも可決承認された。

なお幹事会出席者は、野瀬、佐藤(弘)、難波、二階堂、丸野内、各幹事の外、会員通信担当の梅田氏、ビブリオグラフィー担当の乾氏及び世話人山田(喬)氏と次回世話人高木氏であった。

記

- (1) 今年度ビブリオグラフィー：原稿締切日は11月15日、23日現在27部しか到着していない。もし期限までに110部を割ると今年度分のビブリオグラフィー作成のための補助金(13万円)が出なくなり、作成が非常に困難となるので会員の方々の協力を要請する。
- (2) 次期幹事選挙：別項の如く行う。なお、難波、二階堂両幹事があたることになった。
- (3) 会員名簿作成：堀川、佐藤(弘)両氏の尽力により、間もなく名簿が完成する。なお、名簿の後には当学会の会則が載せてあり、名誉会員制の設定(別項参照)により変更が加えられた。
- (4) 名誉会員制：数年来幹事会で協議されてきたが、ここに新しく名誉会員制を設けることになった。当学会に功勞のあった方々の中から適時に幹事会が推薦し、その都度総会の承認を得て、名誉会員を選ぶことになった。なお名誉会員に選ばれた方々は会費納入の義務が免除される。
- (5) 新入会員：新入会員、退会々員(別項参照)についてはすべて承認された。
- (6) 次回研究会：下記要領で開催する。

世 話 人：九州大学医療短大、高木良三郎氏
会 期：昭和 51年5月28日（金）、29日（土）
場 所：九電ホール

シンポジウムについては、“functioning cell culture について”と“組織培養における pitfall ”あるいは“組織培養における限界について”を予定している。（別項参照）

(7) 次々回研究会：

世 話 人：日本ロッセ研究所 高野宏一氏

(8) その他：①東大医科研、勝田氏がこの程雑誌 In Vitro の日本における coresponding editor になられ当該への投稿の窓口として便宜を計って下さいます。御利用下さい。

②前回幹事会で大阪歯科大川原氏より提案されたアメリカの Tissue Culture Association からの本会に対する joint meeting の申し入れに対しては詳しい情報を集めて検討する。

③雑誌「組織培養」より本研究会のシンポジウムの記録を記載させてほしいとの申し出があった。これに関しては、その都度の研究会の世話人の方に一任することにした。

（文責 丸野内）

※第 40 回研究会を終つて

山 田 喬（独協医大 病理）

今回の研究会では、創立 20 周年の記念を兼ねての研究会を開催する意味で、幾つかの新しい企画を試みた。その趣旨は“ここらあたりで初心に帰って、新たな飛躍のための脱皮をはかりたい”と云うことであった。そこで特別講演として医科研、勝田甫先生に“日本組織培養学会のはじまり”と云うお話を伺い、また国立遺伝研、吉田俊秀先生に、多年の労作の集大成である“染色体に書かれたネズミの歴史”の映画を上映していただいた。またこれまで毎回行われていたシンポジウムを思いきって止めにし、主として培養技術を中心とした内容の Workshop 形式の話しを ①肝細胞培養、②リンパ球 T、B 細胞分離培養法、そして③骨髄培養法の各テーマの下に、各々 2～3 名の方々にお願いした。

恐らくこれまでの本研究会開催地にくらべて、著しく交通不便である栃木県宇都宮在にある独協医科大学の講堂で研究会を開催したので、参加者が少いのではないかと心配したが、幸いなことに予想を上まわる参加者があった。即ち会員 84 名、非会員 104 名、合計 188 名の参加者があり盛会展に研究会を終了できたことを喜びをもって報告したい。

一般演題も程よく申込みがあり、予定時間に過不足なく発表の時間を配分することができました。

なお Workshop の講演内容のみを雑誌“組織培養”に掲載したいと思って居ります。単に研究発表の記録にとどめず、これを基にして、それぞれの講演内容及び質疑応答内容をふくめて、

一つのまとまった技術論として御執筆載く様にお願ひしてあります。

この研究会の開催にあたっては独協医科大学微生物学教室安村美博先生及びその教室員一同の絶大な御援助があったことを附記し、御礼申しあげます。

会員各位の御協力を心から感謝します。・

血清をねかせる？！

一般に長く保存した血清より新鮮な取りたての血清の方が培養にはよいと思われている。しかし CHO-NAK 細胞を用いた relative plating efficiency (rPE) でみている限り、この様な通念とは逆の例に多く遭遇する。新鮮で取りたての血清で colony の形成が押えられる例が多く、-20℃ に数ヶ月に渡ってねかせた血清ではその様な例の頻度は著しく低い。採取直後に低ランクと判定されたものを加熱したり、ある程度ねかせるとランクのあがる例も多い。採取後の新鮮血清中には何か labile な inhibitor 様因子があるらしい。これが普遍的な事象か否かはまだ不明だが、Drosophila の cell でも同様な現象がみついている。同じ個体の血清でも分離方法を変えたとこの様な inhibitory effect が変ることから、どうも一種後天的な？要因が大きく影響する様である。

いずれにせよ血清もウイスキーと同じく、-20℃ 程度でじっくりねかせることによって一種の安定状態が醸しだされるのかも……？。Newborn calf からは丁度ウイスキー 1 ビン程度が得られ、心なしかねかせた血清は始めの鮮紅色から落ちついたコハク色になっていく。多くの細胞種に良好な blend は？とついつい考えたりするのはそのせいかもしれない。

(三菱化成生命研中標準血清センター 阿部武丸)

新入会員

所属機関	同住所・電話	氏名	専門分野
東京大学医科学研究所 癌細胞学研究室	東京都港区白金台 4-6-1 〒108 03-443-8111 内 259	許南浩	組織培養
岩手医大歯学部 口腔外科学第Ⅱ講座	岩手県盛岡市中央通り 1丁目 〒020 0196-51-5111 内 4317	小島誠	口腔外科
独協医大微生物学教室	栃木県下都賀郡壬生町大字 北小林 880 〒321-02 02828-6-1111	丹羽章	微生物学・ 細胞生物学
九州大学医学部 第1内科	福岡市東区馬出 3-1-1 092-641-1151 〒812 内 2203	仁保喜之	内科学・ 血液学
独協医大微生物学教室	栃木県下都賀郡壬生町大字 北小林 880 〒321-02 02828-6-1111	山本勝彦	微生物学

所属機関	同住所・電話	氏名	専門分野
麻布獣医大 家畜繁殖学研究室	神奈川県相模原市湖野辺 1-17-71 〒229 0427-54-7111	大地 隆 温	家畜繁殖
日水製薬 開発研究部	埼玉県草加市稲荷町 1805 〒340 0489-24-1631	水口 昌 宏	組織培養
京都大学医学部 医化学教室	京都市左京区吉田近衛町 〒606 075-751-2111 内4378	田代 真 一	生化学
日本医大 第2病理学教室	東京都文京区千駄木 1-1-5 〒113 03-822-2131	石河 閑 子	細胞生物学
日本医大泌尿器科	同 上	西川 源一郎	泌尿器科学 (病理学)
同 上	同 上	秋元 成 太	同 上
東京大学薬学部 微生物薬品化学教室	東京都文京区本郷 7-3-1 〒112 03-812-2111 内4562	後藤 佐多良	生化学・ 細胞生物学
佐々木研究所化学部	東京都千代田区神田 駿河台2-2 〒100 03-292-2051	長瀬 す み	生化学

退 会 者

1975年10月23日(幹事会で承認)

個人会員

五十嵐 紀 子	東邦大	真 保 俊	予 研
森 澄 子	東京医大	尾 里 啓 子	京大結研
神 保 勝 彦	都立衛研	岸 本 善 文	京大医
黒 沢 功	群馬大	加 藤 良 一	日水製薬
森 脇 絢 子	癌 研	安 達 瑠	"
上 田 俊 男	東京女子医大	鈴 木 成 美	松下病院
斎 藤 和 久	慶大医	佐 藤 昭 彦	日綿実業
酒 井 真 英	予 研	河 合 和 夫	静岡中央病院

桜井淑子 予研
附田豊子 ”
松本雄雄 武田薬品

賛助会員

栄研化学
北海計量
国産化学
大五栄薬
日綿実業

Microbiological Associate

武田薬品

編集後記

このコラムは度々、学会行事であるビブリオグラフィー出版、幹事選挙、会員通信出版などへの会員の御協力を得られないことを慨嘆する文をのせてきたが、この号もビブリオグラフィー原稿再募集についてのお願いを掲載することになり、慨嘆することになってしまった。

商業雑誌の中に本学会の機関誌的役割をはたさんとするものが出現したり、会員通信の有様も再検討する時期にきているのであろう。

本年度最終号を出すにあたり、原稿執筆などで御協力いただいた各位に感謝いたします。

(S)

1975年 Bibliography 原稿募集についての
再度のお願い

会員各位の1974年発表の論文についての bibliography 用の原稿がいまだに70数点しか集っておりません。

文部省の補助金を得ている関係上、120点以上を集めないと発行することが出来ません。皆様の御協力を重ねてお願いいたします。

敬誌要綱は昨年、一昨年と同じです。1974年の年号のついた論文の英文抄録を電動タイプで15×22cm以内に治めて打って下さい。

宛先は 〒104 東京都中央区築地5-1-1

国立がんセンター 生化学部

佐藤茂秋

〆切は昭和51年1月末日迄と延長いたしますが、お忘れなく、今すぐにも用意してお送り下さい。

(昭和50年12月 梅田代筆)